

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18644

研究課題名（和文）実践者との対話を通した子どもの経験の記述に関するフォト・エスノグラフィーの開発

研究課題名（英文）Development of Photo Ethnography on the Description about children's experiences through dialogue with practitioners

研究代表者

中坪 史典（Nakatsubo, Fuminori）

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：10259715

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、写真を介して研究者と実践者が対話することで、子どもの経験を描き出すための新たな質的研究方法論、フォト・エスノグラフィーの開発を試みたものである。保育者の環境構成や、保育施設に設置される物的環境を中心に、日本の文化的特徴を映し出した写真や、海外の文化的特徴を映し出した写真収集するとともに、それらを用いて、研究者と実践者と対話することで、日本の暗黙的価値や文化的慣習に関する保育者の実践知を導出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

（1）保育者の環境構成や保育施設に設置される物的環境の写真を通じて研究者と保育者が対話することで、普段私たちがあまり意識しないような、日本の幼児教育の中に潜在する価値観や習慣などを浮き彫りにした。
（2）写真を介した研究者と保育者が対話し、そこで生成されたナラティブを分析することで、フォト・エスノグラフィーという新たな質的研究方法論を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to develop a new qualitative research methodology, photo-ethnography, to portray children's experiences through a dialogue between the researcher and practitioner through photography. I derived early childhood teachers' practical knowledge of Japanese implicit values and cultural practices through a dialogue with practitioners using photographs that reflect Japanese cultural characteristics and those of foreign cultures.

研究分野：幼児教育学

キーワード：写真 研究者と実践者の対話 質的研究方法論 フォト・エスノグラフィー 実践知

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

写真は今日、いつでもどこでも手軽に撮影できる。こうした状況は、私たちに「新たな日常」をもたらした。それは、あたかもノートを取るように写真を撮り、カメラのシャッターを押すことよりも、大量の静止画を収集し、管理・編集することへと行為の重心を移行させたことである(岩谷 2015)。

保育を営む実践者にとっても写真は、身近な記録媒体となっている。デジタルカメラで収集したデータは、一枚の写真にテキストを付すことで、子どもの経験を物語ることもできれば、複数の写真を配列することで、子どもの経験のプロセスを表現することもできる。文字記録のフィールドノートと同様、収集された写真データもまた、研究者がエスノグラフィックな方法論を用いて分析・解釈し、背景や文脈を考慮しながら何らかの論理を介在させることで秩序を与えることを可能にする(岩谷 2015)。さらに、対話を引き起こすキュー(cue)として写真を位置付けることで、暗黙的な知識や活動の背景に即したナラティブを生み出すこともできる(福島 2001; 岩谷 2016)。

このように写真は、記録や表現の手段、現象を読み解くデータ、他者との対話の媒介などの機能を有しており、多声(異なる見方)を重ね、相互主観的解釈を紡ぎながら、保育実践における子どもの経験を「厚い記述」(Geertz 1973)で描き出す可能性を有する。それにもかかわらず、研究者と実践者の対話を引き起こし、ナラティブを生み出すツールとしての写真の可能性については、これまで検討されてこなかった。

2. 研究の目的

そこで本研究では、デジタルカメラで収集した写真データを介して研究者と実践者が対話し、相互に解釈することを通して、子どもの経験を描き出すための、新たな質的研究方法論としてフォト・エスノグラフィーを開発し、その可能性と課題を検討することである。

研究者と実践者が協働で文脈を考慮し現象を理解するという取り組みは、むしろ写真だからこそ可能となるにもかかわらず、その方法論は未開拓のままであった。したがって新たな質的研究方法論としてのフォト・エスノグラフィーの開発は、研究者にとっても実践者にとっても省察的に検討するためのツールとなることが期待できる。

3. 研究の方法

広島県の M 幼稚園、S 保育園、東京都の K 保育園において、写真を介して研究者と実践者が対話を重ね、相互主観的解釈を紡ぎ出すことで、子どもの経験の描出を試みた。同様に、米国、台湾、香港の実践者とも、写真を介して対話した。対話を通して生み出されたナラティブは、すべて逐語録化し、フォト・エスノグラフィーを開発するための検討材料として分析した。

4. 研究成果

<研究成果 1 >

[問題と目的]: Tobin (1989) が開発した Multi-vocal Visual Ethnography は、映像を刺激媒体(cue)として保育者の多声的な語りを引き出す画期的な研究方法論であった。これによって研究者は、保育者の暗黙的な実践的知識を諸側面から捉えることができる。これに刺激を受けた筆者は、子どもの経験を記録した写真を刺激媒体(cue)とすることで、保育者の暗黙的な実践的知識を捉えることを試みた。本研究の目的は、保育者の多声的な語りを引き出すツールとしての写真を検討することで、研究方法論としてのフォト・エスノグラフィーの可能性を考察することである。

[対象と方法] : 次の手順を実施した。(a) 日米の保育施設を対象に、それぞれの国で特徴的な保育環境とそれをめぐる子どもの経験に関する写真を用いて、小規模のフォト・エスノグラフィーを作成した。具体的には、米国の保育施設で特徴的な室内環境としてのラグ(カーペット)、日本の保育施設で特徴的な戸外環境としての園庭(土の地面)に注目した。(b) 作成したフォト・エスノグラフィーを介して、日本の保育者(5名)と対話した。(c) 対話を通して生み出されたナラティブをもとに、保育者の多声的な語りを引き出すツールとしての写真について検討した。

[結果と考察] : 第一に、Tobin, Hsueh & Karasawa (2009) は、映像を媒介とした保育者の多声的な語りには、その国の社会・文化的習慣、価値観、行動様式が映し出されることを明らかにした。この点において本研究は、写真をツールとする場合も映像と同様に、その国の社会・文化的習慣を映し出す語りが発せられることが明らかになった。例えば、米国のラグをめぐる子どもの経験に関する写真をみた日本の保育者は、子どもが靴を履いて遊んでいることに注目して次のように語っており、米国の保育環境に対して違和感を感じていた。こうした異文化の状況に対する違和感は、日本の保育者が有する文化的価値観を反映していると捉えることができる。

第二に、その一方で、Tobin, Hsueh & Karasawa (2009) が明らかにした、その国の社会・文化的習慣、価値観、行動様式を映し出す保育者の語りは、例えば、子ども同士の喧嘩をめぐる保育者のかかわりなど、その多くは一定時間において展開される動的な状況としての出来事(事象)から誘発されていた。それに対して、本研究における保育者の語りは、室内環境としてのラグや戸外環境としての園庭(土の地面)など、静的(安定的)な状況としての保育環境、しかも数枚程度の限られた写真から誘発されたものであり、映像と比較すると明らかに情報量が少ない。そうした中、例えば、以下のように保育者は、園庭(土の地面)特有の遊びの広がりについて例示しているが、こうした語りは、むしろ静的(安定的)な状況を捉え、情報量が少ないことで保育者の実践的知識が想起されたように思われる。

以上のように、ヴィジュアル・エスノグラフィーが保育者と子どもの相互作用の背後に潜在する行為の意味に関する保育者の実践的知識を引き出すのに有益であるのに対して、研究方法論としてのフォト・エスノグラフィーの場合、素地となる保育環境の背後に潜在する意味や働きに関する保育者の実践的知識を引き出すのに有益であると考えられる。

<研究成果2>

[問題と目的] : 保育の営みは、社会や文化によって作り出される習慣、価値観、行動様式などの影響を知らず知らずのうちに受けている(e.g. Tobin et al 2009)。Tobin (1989) は、保育場面の映像を刺激媒体(cue)として保育者の多声を収集することで、保育実践の文化的意味を探り出した。彼が開発した Multi-vocal Visual Ethnography において映像は、保育者の感情を喚起し、多様な意見を引き出す上で有効に機能した。本研究の目的は、Tobin (1989) の手法を援用し、写真を刺激媒体(cue)と位置付けることで、(1) 社会・文化的意味を映し出す保育実践の一端を探り出すことを試みる。(2) (1) の知見に基づき、写真を媒介として保育者の多声を収集する研究方法について、映像とは異なる特徴的な知見の導出を試みる。

[対象と方法] : (a) 日本と米国の保育実践を対象にフィールドワークを実施し、小規模のフォト・エスノグラフィーを作成した。具体的には、日米それぞれの保育施設で特徴的な保育環境とそれをめぐる子どもの経験に関する写真を収集した。(b) 作成した小規模のフォト・エスノグラフィーについて、米国の保育者6名、日本の保育者5名と対話した。(c)

対話の記録を逐語録化した（米国の保育者の語りについては、逐語録化（英語）したものを日本語翻訳した）。（d）逐語録の中から、日米の保育者の疑問や違和感が出ていると判断される箇所を抽出して検討した。（e）分析結果をもとに、日米の保育者がまるで対話しているかのような多声的なテキストの生成を試みた。

【結果と考察】：写真を媒介として保育者の多声を収集する研究方法の特徴について、とりわけ写真の特質として、「静的（安定的）な状況であること」「繰り返し発生する場面や状況であること」「一枚の画で完結していること」「一瞬だけを切り取って、その瞬間にストーリーをもたせることができること」「見る側が想像を膨らませることができること」「見るのに時間がかからないため、見る側は、瞬間のインスピレーションを働かせることができること」「動画よりも表現が抽象的であること」が明らかになった。

以上から、第一に、映像は、動的な出来事（事象）の記録や、一定時間の様子の記録を収めるのに適しているのに対して、写真は、静的（安定的）な状況の記録や、繰り返し発生する場面や状況の記録を収めるのに適していると言える。第二に、映像は、保育者と子どもの相互作用の様子を映像に収めることで、行為の意味に関する保育者の実践的知識を捉えることができるのに対して、写真は、素地となる保育環境の様子を写真に収めることで、その意味や働きに関する保育者の実践的知識を捉えることができると言える。

写真を媒介として保育者の多声を収集することで、素地となる保育環境が社会・文化的習慣、価値観、行動様式の影響を知らず知らずのうちに受けていることを明らかにすることができる。

保育実践における子どもの経験とは、子どもが対象世界とかわり、意味を構成し、他者との関係を紡ぎ上げるような「意味と人の関係性の編み直し」の活動であることから（佐藤1995）、到達目標や成果指標など学齢期以降の評価尺度を用いて捉えることは難しい。こうした子どもの経験の豊かさを描き出すための一つの方法として、研究者と実践者が対話し、研究者が感じる部外者（outsider）の視点と実践者が感じる部内者（insider）の視点の両方を響き合わせながら、省察的に検討することが考えられるのではないだろうか。

本研究において筆者は、この点を最重要課題とし、新たな質的研究方法論としてのフォト・エスノグラフィーの開発を試みた。写真は映像と異なり、短時間のエピソードや瞬間の出来事の記録に優れるとともに、保育の中で生じたとりとめもない、しかし実践者の心が揺さぶられたような場面を記録することができる。写真は、研究者と実践者の双方にとって、子どもの経験を記録する道具であるとともに、そこで撮影された写真データは、両者が相互に子どもの経験を読み解き、表現し、対話するツールとして機能することが明らかにされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Fuminori Nakatsubo
2. 発表標題 “How do the taiwanese teachers recognize the “Class Competition in ECEC: Do you think appropriate or inappropriate?”
3. 学会等名 28th EECERA (European Early Childhood Education Research Association) ANNUAL CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中坪史典
2. 発表標題 保育者の多声的な語りを引き出す研究方法論としてのフォト・エスノグラフィー
3. 学会等名 国際幼児教育学会第39回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水野佳津子・中坪史典
2. 発表標題 「背中の保育」のアプローチと乳児の育ち
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中坪史典
2. 発表標題 映像や写真を介して保育者の多声的な語りを収集する - 文化を反映する保育実践を描き出す試み -
3. 学会等名 日本教育方法学会第21回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水野佳津子・中坪史典
2. 発表標題 乳児に対する保育者のアプローチとしての「背中の保育」
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中坪史典
2. 発表標題 写真を媒介とした保育者のマルチボイス・エスノグラフィーの開発
3. 学会等名 日本質的心理学会第15回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水野佳津子・中坪史典
2. 発表標題 なぜ保育士としての私は乳児の排泄の自立を楽しむことができるのか？ - 大人の固定観念を越えた「驚き」 -
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fuminori Nakatsubo, & Wen-Huei Hsieh
2. 発表標題 “How do the taiwanese teachers recognize the “Class Competition” in Japanese ECEC? : Focusing on the teachers’ involvement”
3. 学会等名 20th PECERA (Pacific Early Childhood Education Research Association) ANNUAL CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fuminori Nakatsubo, & Katsuko Mizuno
2. 発表標題 “ A Case Study of the Japanese Nursery Teacher Approaching the Infant and Toddlers Using her Back ”
3. 学会等名 OMEF (World Ogranization for Early Childhood Education) Asia Pacific Regional Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Fuminori Nakatsubo Lab https://home.hiroshima-u.ac.jp/nakatsub/index.html http://home.hiroshima-u.ac.jp/nakatsub/index.html</p>

6. 研究組織		
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)
		備考